

# 南海蒼空戦記5

機動部隊激突

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之  
地 図 ・ 図 版 安達裕章  
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	魔鳥 <sup>きた</sup> 来る	9
第二章	夜の復讐者	27
第三章	地中海の海狼	55
第四章	巨大なる前衛	101
第五章	第二次マリアナ沖海戦	149
第六章	防空態勢	235



# 南西太平洋要図



# ティレニア海周辺図





南海蒼空戰記 5  
機動部隊激突



第一章

魔鳥きた来る

## 1

日本軍の戦闘機が墜落して行く光景は、指揮官機のコクピットでは視認できなかった。

最後尾に位置する四番機からの報告で、その事実を知っただけだ。

「『ク로우4』、状況報告せ」

ボーイングB29 スーパー・フォートレス——大型機製造の名門ボーイング社が開発した、四発重爆撃機の増加試作機四機を束ねるジュリアン・カーター中佐は、四番機に命じた。

従来の主力重爆撃機ボーイングB17 フライング・フォートレス、コンソリデーターD24 リベレーターを、あらゆる性能で上回る機体だが、敵戦闘機と交戦して、無傷で済むとは考えていない。相手は飛電ジャックの改良型——高高度での戦闘に対応できるよう、排気タービン過給機を搭載し、これまで

に多数のB17を墜おとして来た機体なのだ。

「『ク로우4』より『ク로우1』。胴体及び二番エンジンに被弾。エンジンの火災は消火完了。飛行に支障ありません」

四番機の機長マイヤー・ストックウエル大尉が報告した。

編隊しんがりの殿軍で、八機もの敵戦闘機に集中攻撃を受けたにも関わらず、声は落ち着いている。

この最新鋭機が、墜とされるはずがない——そんな自信を感じさせた。

「他のジャックはどうだ？」

「追撃して来ますが、射程外です」

「了解」

カーターは、ごく短く返答した。

改良型のジャックも、高度が二万六〇〇〇フィートを越えれば、上昇性能は大きく低下する。彼らが再び接近して来るまで、数分の余裕がある。

「地上に発射炎を確認！」

機首の爆撃手席に座るアラン・ニコル中尉が報告した。

小隊が硫黄島上空に進入したところで、敵弾が炸裂し始めた。

空中に多数の閃光が走り、黒い爆煙が湧き出す。

煙は黒雲のように立ちこめ、硫黄島の姿を覆い隠さんばかりだ。

「無駄だ、ジャップ」

カーターの唇が、嘲笑の形に歪んだ。

対空砲火は、何ほどの脅威にもならない。炸裂している高度は、B 29から一〇〇〇メートル以上も下だ。

飛び散る弾片が機体を傷つけることもなければ、全長三〇・二メートル、全幅四三・一メートルの巨体が、爆風に煽られることもない。

日本軍の対空砲には、現在の飛行高度三万フィートまで砲弾を届かせる力はないのだ。

爆煙を下方に眺めながら、銀色に照り輝くジュラ

ルミンの巨鳥は、悠々と硫黄島上空を通過して行く。米日開戦以来、一貫して日本軍の強力な航空要塞であり続けた地だが、さほど大きな島ではない。

一分とかからずに島の上空を通過し、北方海上へと抜ける。

『クローウ』より全機へ。復路にて投弾する。全機左反転。針路一八〇度」

硫黄島から少し距離を置いたところで、カーターは下令した。

操縦士のグレッグ・トムソン大尉がステアリング・ホイールを左に回し、機体が傾斜する。

反転を終えたときには、たった今通過した硫黄島が、指揮官機の正面下方に見えている。

「前下方よりジャック！」

ニコルが注意を喚起した。

ジャックが、突き上げるように向かって来る。上昇速度は鈍いが、彼我の距離は詰まっている。

カーターが一番機が、真っ先に銃撃を開始した。

「連射音が伝わり、機首下面から二条の火箭が噴き延びた。」

後続する二、三、四番機も、指揮官機に倣う。

一機当たり二条、四機合計八条の火箭が、前下方から突つ込んで来るジャックに殺到する。

ジャックが左右に分かれた。

カーター機の機銃座が敵の動きに追従し、左に旋回した。一二・七ミリ弾の火箭が青白い鞭のようにしない、ジャック一機を捉えたように見えた。

ジャックは機体を翻し、降下に転じる。火も、煙も噴いていない。

カーターの目には、ジャックのパイロットが怖れをなして、逃げ出したように見えた。

「正面に硫黄島」

「クローウ」より全機へ。目標『ココナッツ』。投

弾用意！」

ニコルの報告を受け、カーターは全機に命じた。

「爆弾槽開きます」

ニコルが報告を送り、カーター機の速力が僅かに低下する。爆弾槽の扉が開かれ、空気抵抗が増大したためだ。

「コントロール、アランに渡します」

トムソンが、新たな報告を上げた。

ノルデン照準器を用いた爆撃を実施するため、投弾完了まで、操縦を爆撃手に委ねるのだ。

地上に再び、多数の発射炎が閃いたが、敵弾はB29まで届かない。何十発、何百発を発射しようが、弾片をばら撒くだけだ。

「投下！」

爆撃手席から、ニコルの叫び声が届いた。

機体が微かに、上下に揺れ始めた。

一二発の一〇〇〇ポンド爆弾が、硫黄島の中央に設けられている日本軍の飛行場——第二〇航空軍の呼称「ココナッツ」目がけて、毎秒一発の間隔で落下し始めたのだ。

「二番機、投弾。三、四番機、投弾」

尾部銃座を担当するフレデリック・コ克蘭曹長が、インターカムを通じて報告する。

全機が投弾を完了するまで、一分とかからない。

カーター機が投下を開始してから五〇秒後には、「ク로우4」より「ク로우1」。我、投弾完了」の報告が届く。

B 29最初の攻撃は、短時間で終わったのだ。一分余りが経過したとき、

「『ココナッツ』への命中六発を確認。『マンゴー』に二発、『パイヤ』に三発が命中した模様」

ニコルが報告を上げた。

B 29四機が投下した一〇〇〇ポンド爆弾四八発のうち八分の一、一二・五パーセントが目標に着弾したのだ。

本来の攻撃目標ではなかったが、コード名「マンゴー」こと北部の飛行場と「パイヤ」こと南部の飛行場に落下したものを戦果に含めるなら、二三パーセントが有効弾となった計算だ。

四発の重爆撃機による水平爆撃は、もともと命中率が良好とは言い難い。しかも、三万フィートという高度からの投弾だ。

命中率が二三パーセントなら、好成绩と言える。

カーターが口元に笑みを浮かべたとき、

「ク로우4」より「ク로우1」。ジャック、追って来ます！」

ストックウエルが、新たな報告を上げた。

「ク로우3」、「ク로우4」を援護せよ」

「ク로우3」了解。「ク로우4」を援護します」

カーターの命令を受け、三番機の機長サイモン・ミルナー少佐が即座に応答した。

「奴らも必死だな」

カーターは、唇の端を吊り上げて呷いた。

硫黄島を爆撃した四機が、B 17よりも遥かに強力な新型機であることは、彼らも認識したはずだ。

一機だけでも撃墜し、B 29に勝てることを実証したいのだろう。

四機のB29は高度を保ち、緊密な編隊形を組んだまま飛行を続ける。

「三番機、四番機、射撃開始！」

「ジャック三機、本機に向かつて来ます！」

コ克蘭が、二つの報告を続けざまに上げる。

コクピットの後方から、連射音が届く。

尾部と後部下方、二基の機銃座が、追いつがるジャック目がけて射撃を開始したのだ。

小隊二番機も、尾部から火箭を飛ばしている。

四機の巨人機が、食い下がるジャックに一二・七ミリ弾を浴びせつつ、硫黄島から遠ざかってゆく。

「ジャック反転！ 離脱します！」

「『ク로우3』より『ク로우1』。ジャック反転。追撃を断念しようです」

コ克蘭の新たな報告と、三番機のミルナー機長の報告が、前後して飛び込んだ。

「オーケイ！」

カーターは、安堵の息を吐き出しながら叫んだ。

どうやら、危険は去ったようだ。

「『ク로우1』より各機。状況報せ」

「『ク로우2』異常なし」

「『ク로우3』、ジャックの攻撃により機銃座一基を損傷しましたが、飛行には支障ありません」

「『ク로우4』、新たな被弾なし」

「『ク로우1』より全機へ。作戦終了。グアムに帰還する」

（我が隊の完勝だ。爆撃も、敵戦闘機との空戦も）  
全機に命令を送りながら、カーターは喜びを噛みしめた。

前線から長く待ち望まれていた最新鋭重爆撃機B29が、初めてマリアナ諸島に配備されたのは四月二一日。今より三週間前だ。

増加試作機で編制された小部隊による実戦テストが目的であり、結果は機体の改良や、量産機で編制された正規の爆撃飛行隊に反映される。

貴重な最新鋭機であるため、部隊は比較的 안전한

グアム島の基地に配置され、入念に時間をかけて準備が進められた。

この日——現地時間の一九四四年五月一二日、B29が初陣を迎えた。

「四機だけの出撃は危険過ぎる。B17との混成編隊で出撃すべきではないか」

20 A F司令部には、そんな意見もあったが、カーターは、

「戦略航空軍司令部からは、『実戦テストはB29のみで実施せよ』と命じられております」

と言い張り、四機の最新鋭機を率いて、硫黄島へと飛び立った。

「四機だけなら、日本軍は少数機による偵察と見なし、さほど多数の戦闘機を出して来ないだろう」

カーターは、敵の動きをそのように予測していたのだ。

推測通り、硫黄島の日本軍は、四機のB29を八機のジャックで迎え撃った。

カーターの小隊は、ジャックの迎撃を正面から突破し、硫黄島への投弾に成功した。

撃墜機数は、不確実なものを含めて三機。

B29は二機が損傷したが、喪失機はない。

護衛戦闘機が一機も付いていない爆撃機だけの小隊が、自隊に倍する敵戦闘機を向こうに回し、撃墜三機、被撃墜機なしという戦果を上げ、爆撃任務を成功させたのだ。

文句のつけようがない完勝と言える。

合衆国の航空部隊、特に陸軍戦略航空軍は、

「戦闘機の護衛なしで任務を遂行できる爆撃機」を理想と考え、ボーイングB17、フライイング・フ

ォートレス、コンソリデーターB24、リベレーター」といった機体を開発して来た。

それらの機体は、防御力が極めて高く、敵戦闘機に対して十分な自衛能力を持つと考えられて来たが、現実には理想通りには行かず、多数がヨーロッパや太平洋で失われた。

B 29は、その思想の延長線上に誕生し、防御火器、防御装甲共に、B 17、B 24のそれを大きく上回る機体となった。

その実力は、この日実証された。

戦略航空軍は、「理想的な重爆撃機」の決定版と呼ぶべき機体を手に入れたのだ。

八月には、B 29の量産機で編制された正規の爆撃飛行隊がマリアナ諸島に展開し始める。

その暁には、20 A Fは硫黄島の基地など素通りし、日本本土を直接叩けるようになる。

銀色に照り輝くB 29の大編隊が、トーチキョーやキョウトの上空に出現したとき、日本人は自らの敗北を悟るであろう。

その光景が、目に浮かぶようだった。

(次は夜だな)

カーターは、明日以降のことを考え始めている。

テスト部隊の任務は、今回だけで終わるわけではない。夜間爆撃のテストも残っている。

夜の相手となる機体は「極光」。

レーダーを装備し、火力も大きい強敵だ。今回、ジャックを相手にしたようにはいかない。

日本本土の上空を、B 29の大編隊が覆うまでには、まだ通過しなければならぬ関門があった。

## 2

「確かな情報なのかね？」

連合艦隊司令官日比野正治大將は、重苦しい声で参謀長千田貞敏少將に聞いた。

日比野の前には、報告電の綴りが置かれている。

第一一航空艦隊司令部が、硫黄島に來襲した四機の敵重爆について報告したものだ。

通常であれば、たかだか四機程度の敵機の來襲が、緊急信扱いで報告されることはない。

一一航艦司令部が、取って異例の措置を採ったのは、來襲した敵機が、かねてから警戒されていた敵

の新型重爆撃機と判断されたためだった。

「間違いありません」

千田は、声を落ち着かせようと努めながら答えた。

「一一航艦の報告電は、敵機が高度九五（九五〇メートル）以上で硫黄島上空を通過したこと、敵機の最大時速は五〇〇キロ以上と見積もられることを伝えていきます。従来敵重爆に、このような飛行性能はありません。硫黄島を襲った敵機は、B 29であると断言します」

「貴官も、軍令部も、B 29の登場は本年八月以降と言っていたではないか」

日比野は、詰問するような口調で言った。

B 29の出現時期を見誤っていたのだとしたら、ことはあまりにも重大だ——そんな非難の言葉が、日比野の喉元までこみ上げているようだった。

「機数から見て、来襲したB 29は、実戦における運用試験を目的としたものだと考えられます。量産機ではなく、増加試作機かもしれません」

航空甲参謀内藤雄中佐が言った。

日本軍も、新鋭機を正式配備する前に、増加試作機による実戦テストを行ったことがある。

今年二月、夜間戦闘機の極光が攻撃し、約二〇機のB 17を撃退した戦いは、その典型だ。

B 29が、予想より三ヶ月も早く出現したのは、これと同じではないか、と内藤は考えたのだろう。

千田も、内藤に同調した。

「甲参謀に賛成です。B 29は、米軍でも最新鋭の機体である以上、慎重に運用すると考えられます。多数のB 29をいきなり実戦に投入するような真似はせず、実地テストによってデータを集める、という手順を踏むでしょう」

「B 29の正式配備は、もう少し先になると言いたいのかね？」

日比野の口調には、懐疑的な響きがあった。

参謀長や甲参謀が、自らの判断ミスを取り繕おうとしているのではないかと疑っている様子だ。

「おっしゃる通りです。B 29の実戦部隊がマリアナに展開し始めるのは、当初想定された通り、八月以降と考えられます」

「楽観はできぬ」

日比野は、僅かに顔をうつむけた。

幕僚を糾問するような口調ではなくなっていたが、顔には懊惱の色が見て取れた。

現実にはB 29が前線に出現した以上、日本本土が空襲されるのは、もう時間の問題となった、と考えている様子だ。

B 17を上回る四発の巨人機が、帝都を初めとする大都市の上空に大挙出現し、爆弾の雨を降らせる光景が、脳裏に浮かんでいるのかもしれない。

「米軍の立場で考えた場合、現時点では、仮にB 29の正式配備が可能であったとしても、マリアナ諸島への展開は、躊躇するのではないでしようか？」

作戦参謀の山本祐二中佐が発言した。

「我が軍は、昨年一二月のマリアナ沖海戦で受けた

打撃から立ち直り、戦力を回復しつつあります。また、小笠原諸島の我が軍飛行場は健在であり、マリアナ諸島の米軍飛行場を脅かすことが可能です。米軍がこの状況でB 29をマリアナに展開させれば、我が軍は当然、B 29の地上撃破を狙います。それは彼らも予想しているでしょう。米軍が、貴重な最新鋭機を地上で失う危険を冒すでしょうか？」

「作戦参謀に賛成します」

首席参謀の高田利種大佐が発言した。

「米国は、全般に慎重な作戦展開を行う傾向があります。彼らの性格上、B 29の前線配備は、マリアナ諸島の安全を確保してからになると考えます」

「米軍はB 29のマリアナ配備に先立ち、連合艦隊主力の壊滅と小笠原諸島の占領を狙って来る。それが、首席参謀と作戦参謀の主張か？」

日比野の問いに、山本が答えた。

「はい。付け加えて申し上げるなら、小笠原諸島は、必ずしも占領する必要はないはずです。飛行場を無

力化すれば、マリアナ諸島は安全になりますから」

「開戦以来、米軍は多数のB17を前線に配備して来た。フィリピンでも、マリアナでも、我が軍は相当数のB17を撃墜、あるいは地上撃破によって葬ってきたが、米軍はすぐに新手の機体を送り込んで来た。B29についても、多数の予備機を準備した上で、作戦に臨むのではないか？」

眉をひそめた日比野に、千田が答えた。

「B17とB29では、機体の価値が違います。軍令部情報によれば、B29は数々の新技術を用いた画期的な機体であり、あらゆる性能でB17を上回りますが、それだけに製造コストも、B17とは段違いだのことであります。B29一機の価格は、巡洋艦一隻に相当するとの情報もあります。巨大な国力を誇る米国といえども、それほど高価かつ高性能な機体の運用には、細心の注意を払うでしょう」

「本当だとすれば、B29一〇〇機の製造と、巡洋艦一〇〇隻分の建造費用が等しいことになるな」

日比野は首を傾げた。

「幾ら米国の国力が巨大だからと言って、それは大袈裟に過ぎる、と言いたげだった。

「私も、情報にはかなりの誇張があると見ております。ですが、B29がどれほど高価な機体であっても、それが必要であれば、米国は必ず配備するでしょう。米国とは、そういう国です」

千田の答に、幕僚たちの多くが、同感です——と言わんばかりに頷いた。

開戦以来、一年二ヶ月。

この間に、米国が容易ならぬ敵であることを、誰もが思い知らされていたのだ。

「いずれにせよ、マリアナは何としても奪回しなければならぬな。B29が前線に姿を現した以上、本土空襲の危険は顕在化している」

「長官のおっしゃる通りです」

日比野の言葉に、千田は同調した。

現在、連合艦隊は、急ピッチで戦力の再編を進め

ている。

特に戦力の中核となる空母は、在来の「加賀」や翔鶴型空母に加え、重装甲空母「大鳳」、戦時量産型の中型空母「雲龍」とその姉妹艦二隻が戦列に加わっている。

来たるべき決戦では、従来の第三、第四艦隊に、新たに編制された第八艦隊が加わり、正規空母と小型空母を合わせて、一七隻を投入できる。

これに対して米太平洋艦隊は、四月の硫黄島沖航空戦で大きな打撃を受けており、すぐに動ける状態にはない。

「マリアナ奪回の好機と言える。

開戦直後にサイパン、テニアン両島が陥落して以来、日本は長く喉元に刃を突きつけられたような状態で戦って来たが、今度こそ、その状態に終止符を打たねばならない。

「マリアナ奪回作戦は、いつ開始できる？」

「当初は実施時期を六月半ばと考え、作戦案を検討

して来ましたが、大事を取り、七月にしたいと考えております」

日比野の問いには、山本作戦参謀が答えた。

「もう少し、早められないか？」

険しい表情で聞いた日比野に、内藤航空甲参謀が答えた。

「マリアナ沖海戦で消耗した艦上機と搭乗員の補充、及び新造空母に配属される搭乗員の訓練が、六月末までかかります。マリアナ奪回の重要性を考慮しますと、準備が不十分なままで作戦に臨むことはできません」

「入念な準備が必要なことは理解できるが……」

「戦争においては、兵器の性能や数も重要な要素ですが、人材もそれらに劣らず、いやそれら以上に重要です。どれほど高性能な機体であっても、搭乗員がいなければ飛ばせませんし、技量未熟な搭乗員では戦果が上がりません。今は亡き東郷長官（東郷平八郎元帥。日露戦争時の連合艦隊司令長官）は、『訓練

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。